

在日フィリピン人出稼ぎ労働者の精神不健康に関する研究

平野(小原), 裕子

<https://doi.org/10.15017/266>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 26, pp.11-26, 1999-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン：

権利関係：



在日フィリピン人出稼ぎ労働者の 精神不健康に関する研究

平野 (小原) 裕子

Study on Depression Experienced by Filipino Residents in Japan

Yuko Ohara-HIRANO

This study clarifies the socio-economic factors which influence the mental depression of Filipino Migrant Workers in Japan, through qualitative and quantitative analysis.

The result of qualitative data was that the socio-economic factors can be classified into four domains; i.e. 1. Working condition in Japan (“Work Domain”), 2. Family condition in the Philippines (“Family Domain”), 3. Daily life in Japan (“Life Domain”), and 4. Anticipated future after they go back to the Philippines (“Future Domain”).

The quantitative analysis shows that all four domains correlate to level of depression measured by CES-D scores, though for Life Domain the correlation was not significant. The correlation value is Family Domain ($r = .334$), Future Domain ($r = .226$), Work Domain ($r = .215$), Life Domain ($r = .122$)

Qualitative analysis suggested that Filipino Workers are bound by a virtue known as *utang na loob* (a debt of gratitude) offered by their families. This seemed especially important when they had been financially supported by their families before arrival in Japan. This was tested by a two way anova which established a ($p < 0.1$) interaction between Family Domain and financial support by family members in determining CES-D score.

Keyword: Filipino, Migrant Worker, depression, family

I はじめに

1. 在日外国人労働者増加の社会的・経済的背景

最近の在日外国人労働者数の増加は顕著であり、現代日本社会に様々な社会的・経済的インパクトを与えている。在日外国人労働者の特徴としては、就労資格に基づいて就労する合法労働者(以下「合法労働者」)および在留資格期限が失効したあとも日本に残って就労している不法残留者、就労資格外の労働にたずさわる者、労働目的で密入国した者などの非合法労働者(以下「非合法労働者」)がいることである。彼らの国籍は、非合法労働者を含めると、中国、韓国、ブラジル、フィリピン、タイ、バングラディシュ、イラン、ガーナなど、多岐に及ぶが、主に発展途上国出身者の急増が目立つと言われている。また彼らは、日本

で就労可能なビザを取得しやすい日系ブラジル人などを除き、家族を祖国に残して単身で来日する者が多いと言われている。

国際的な労働力移動は、発展途上国から先進国に向かう傾向があるとされ⁴⁰⁾、その背景としては、労働力送り出し国側における押し出し要因—すなわち人口過剰・高い失業率と不完全雇用率、貧困など—および、労働力を受け入れる国における引っ張り要因—日本の場合であれば人口増加率の減退とその結果生じる日本の人口の高齢化による労働力不足—が指摘されている⁴¹⁾。つまり、最近日本で急増しつつある発展途上国出身の在日外国人労働者は、様々な国内事情で祖国では就労せず、海外に働きに出るタイプ(以下「出稼ぎ」)の労働者が多いことが考えられる。

2. 在日外国人労働者の抱える諸問題と精神不健康

日本へ出稼ぎにくる発展途上国出身の在日外国人労働者たちをめぐる諸問題については、日本での過酷な労働、生活環境、地域社会への適応困難や葛藤といった問題が報告されてきた^{8, 15, 16, 17, 25, 28, 29, 36, 43, 46, 47}。また、そのような問題に対して過度に適応を迫られた在日外国人労働者が精神不健康を来たしやすいこと^{1, 13, 26, 32, 33, 41, 42, 44}が指摘されている。このように国際労働力受け入れ国側の社会的・経済的背景に由来する問題が在日外国人労働者の精神不健康に影響していることはこれまでもたびたび示唆されてきた。

一方、海外出稼ぎ生活とは、ある一定期間家族と離れて異国で生活する状況を余儀なくされることを考えると、本来共に生活している家族においては生じにくいと思われる問題が新たに発生したり、より深刻化することが考えられる。例えば、Cruzらは、長期間にわたる海外出稼ぎは、出稼ぎ労働者と祖国に残された子供との関係を崩壊させる問題点があることを指摘している⁹。このように、出稼ぎという行為そのものが与える出稼ぎ労働者とその家族の関係への影響も見逃せない。従って、海外出稼ぎ労働者にとって、家族との関係もまた、精神不健康に影響を与えうる因子として把握される必要があると思われるが、この観点から行われた研究は今までほとんど行われてきていなかったと言ってよい。

3. 本研究の目的

本研究では、以上のことを踏まえ、出稼ぎ目的で来日した在日フィリピン人出稼ぎ労働者(以下「在日フィリピン人出稼ぎ労働者」)¹⁰を対象とし、彼らの精神不健康に影響を与えうる出稼ぎ生活に由来する社会的経済的要因について、包括的に把握・検討することを試みる。また、分析枠組としてはストレスプロセスモデル^{9, 23}を用い、主観的抑うつ状態をマーカーとして、どのような要因がどのように精神不健康に関連しているのかを明らかにする。

本研究の目的は以下のようである。

- 1) 在日フィリピン人出稼ぎ労働者における出稼ぎ特有の社会的経済的ストレインと対処資源の

内容について明らかにする。

- 2) 在日フィリピン人出稼ぎ労働者の属性、社会的経済的特性および対処資源と、精神不健康との関連性を明らかにする。
- 3) 領域別社会的経済的ストレイン間の関連性および領域別社会的経済的ストレインと精神不健康との関連性を明らかにする。
- 4) 領域別社会的経済的ストレインの精神不健康への関連性に対する対処資源の影響のしかたを検討する。

本研究で使用する用語については、以下のように定義する。

「社会的経済的ストレイン」は、出稼ぎ生活において認知される社会的経済的な緊張や葛藤、困難をさすものとする。なお、ストレインとは、突発的なライフイベントに対して慢性的な問題という意味を含んでいるため、life strain³⁷のように使われる。

「対処資源」とは、慢性的緊張、困難状態に対する防衛機制に基づく対処行動様式⁵⁰(以下「対処スタイル」)およびその対処の過程を適応的に遂行するために用意されている心理社会的資源(psychological / social resources)^{37, 50}、また、それらに影響を与えうる要因と定義する。social resourcesには、その人が認知する、自分に対して重大な支援を与えうる家族、友人、同僚、近所の人々、ボランティア団体などとの人間関係ネットワーク³⁷(以下「支援ネットワーク」)を含む。

「精神不健康」については、精神的に健康でない状態をさすが、本研究では特に、自記式抑うつ尺度(CES-D)³⁸で測定することが可能な、主観的抑うつ状態と定義した。

II 対象と方法

1. 対象

本研究は、第一次調査および第二次調査に分けて行われたが、いずれも対象は関東地方のキリスト教の教会の礼拝に出席する在日フィリピン人出稼ぎ労働者である。

- 1) 第一次調査の対象

第一次調査(Focus Group Discussion)は、調査協力を得ることのできた8ヶ所の教会(8グルー

プ)の、計89名(男性66名、女性23名)が対象となった。1グループの参加者は7名から17名であった。8グループのうち、3グループは合法労働者(エンジニア、事務作業員など)、5グループは非合法労働者(工場労働者・建設労働者など)であった。

2) 第二次調査の対象

第二次調査(配票調査)は、同じく調査協力を得ることのできた12ヶ所の教会で実施し、有効回答数346名(回収率62.8%)のうち、労働目的で来日した者で、送金経験の全くない者を除いた計265名が対象となった。

2. 方法

本研究に用いる研究方法としては、第一次調査に質的研究法を、第二次調査に量的研究法を用いた。

1) 第一次調査(Focus Group Discussionおよびインタビュー)の方法

第一次調査は以下の手順で進められた。まず、在日フィリピン人の世話をする教会関係者(フィリピン人および外国人神父、フィリピン人宣教師やシスター、日本人のシスターやボランティアなど)にインタビュー³⁾を行い、在日フィリピン人出稼ぎ労働者を取り巻く環境について情報を収集した。次に、調査協力を得ることのできた関東地方の8ヶ所の教会において、礼拝に出席している在日フィリピン人出稼ぎ労働者(合法労働者及び非合法労働者を含む)を対象に、英語でFocus Group Discussion(以下FGD)を行い、日本での生活における主観的な精神的健康状況やそれに関わる経済的、社会的要因について質問した。FGDはグループ員の相互作用を通して、特定の話題に関する意見や態度、信念、規範に関する情報を得る方法である⁴⁾。この手法は、より探索的な研究に適している⁷⁾。従ってFGDは、本研究の目的である社会的経済的ストレスおよびそれに関連する要因の構造について、より多くの、より多面的な情報を把握、解釈するのにふさわしい方法と考えた。なお本研究では、同一グループの参加者がsimilar characteristics⁶⁾を持つことが要求されるFGDを行うに

あたって、合法労働者・非合法労働者とを分けて別個に実施した。

またFGDを進めるにあたって、限られた時間内に、どのグループにおいても十分な意見や情報を提供してもらうためにあらかじめ次の3つの質問を準備した。

- 1) Have you ever experienced a decline in health, in terms of physical and psychological, during your stay in Japan?
- 2) Would you please tell us when or in what situation you experienced it?
- 3) Would you please tell us how you coped with it?

本研究の目的は、主観的な精神的健康状況の把握であるが、対象者にとってより話やすい雰囲気を作るために、FGDの導入部では、より認知しやすい身体的な健康状況に関する情報を提供してもらうことから始め、次に精神的な健康状況をたずねるといった方法をとった。この時、精神的な健康状態をたずねるのに、普段フィリピン人が日常会話で使用しているpsychological healthという表現を用いた。なお、必要に応じて、FGDに参加した者の中から個別にインタビューを行い、情報を収集した。これは、個人的な問題や意見など、グループでのディスカッションではあられにくい情報²⁰⁾を収集するためである。一回のFGDにかかった時間は、約1時間から1時間半であった。

FGDは、その全過程をテープ録音した。そして会話の内容を、発言者の声の調子やポーズ、また発言者に対する周りの反応(笑い、反発、うなずくしぐさなど)を詳細に書き起こした。また書き起こされたものを内容に従ってコード化し、log book²⁾を作成した。

一方、これらFGDやインタビューによって得られた情報については、より客観的な概念や状況を把握するために、上記教会関係者に再度インタビューを行った。第一次調査実施時期は1995年10月から12月であった。

2) 第二次調査(配票調査)の方法

次に、第一次調査の結果を踏まえ、分析枠組及びおよびそれにそった自記式無記名の調査票を作成した。調査票(A4版7枚)は、英語、日本語、

タガログ語に堪能なフィリピン人に翻訳を依頼し、英語及びタガログ語の2ヶ国語を併記した。

社会的経済的ストレインは、第一次調査で得られた項目の中から調査項目を作成した。そして慢性的な困難、葛藤、緊張の度合いを測定する目的で、Never (0点)からAlways (5点)までの6段階評価で経験頻度をたずねた。また、自記式抑うつ尺度としては、CES-D³⁸⁾を採用した。CES-Dスケールは、抑うつ状態と他の変数との関連を明らかにする研究において、最も頻繁に使用される尺度の一つであることが指摘されている²⁴⁾。移民の研究^{21, 22)}でも使用され、因子妥当性が実証されている²¹⁾。またCES-Dスケールは、身体的症状を尺度項目に多く取りこんでいること、アジア系移民は、精神症状を身体化する傾向があること、という理由からアジア系アメリカ人の精神不健康を測定するのに適していると指摘されている²²⁾。従って、日本におけるアジア系の在日外国人労働者の精神不健康の指標として適用することは妥当であろう。

調査票は、内容的妥当性、基準関連妥当性¹⁹⁾を検討するため、個別及び集団でのバックトランスレーションやプリテスト(計56人)を繰り返し、調査協力を得ることのできた関東地方の基督教の教会12ヶ所において、調査の意図を説明し、配票した。調査票は回答後その場で回収された。第二次調査実施時期は、1996年4月から6月であった。

以下の統計処理はPC版統計パッケージSPSS 6.1Jを用いて行った。定性的データ間の関連についてはカイ二乗検定を、項目間の内的整合性を検討するためにはCronbachの α 係数による分析を、項目間の関連の検討には、ピアソンの積率相関係数、T検定、一元配置分散分析および二元配置分散分析を行った。なお、本研究の分析では、0.1%、1%、5%の有意水準を用いた。

Ⅲ. 第一次調査の結果と考察

1. 第一次調査の結果

FGDの結果は表1, 2のようにまとめた。なお、合法労働者はGroup 3, 5, 7, 非合法労働者は

Group 1, 2, 4, 6, 8である。

1) 主観的な精神不健康感

FGDでは、8つのいずれのグループでも主観的な精神不健康感の経験があることが明らかになった。精神不健康感はdepression, I have worries, heartache, stress, emotional loneliness, pressure, unstableness, tensiyon(タガログ語)²⁾, hopelessness, I feel dark. という単語や文章で表現された。これらはJ.ドウレイの「気分の障害」といった用語で定義される抑うつ気分と共通した項目⁴⁸⁾であった。

2) 社会的経済的ストレイン

在日フィリピン人出稼ぎ労働者の精神的健康状況に関連する社会的経済的ストレインとしては、計24項目があげられ、それぞれ在日仕事関連領域(日本での仕事に関する不満・不安-計12項目。うち、7項目は、日本人の同僚との人間関係に関する内容であることで共通していた)、在比家族関連領域(在比家族に関する不安・不満-計6項目)、日常生活関連領域(日常生活に関する不満・不安-計3項目)、将来関連領域(将来に関する不安・心配ごと-計3項目)があることが明らかになった。以下、これらの領域別社会的経済的ストレインを、「在日仕事関連ストレイン」「在比家族関連ストレイン」「日常生活関連ストレイン」「将来関連ストレイン」とする。これらの社会的経済的ストレインは、表1のようにまとめられた。

3) 対処資源

FGDで調査対象者自身によってあげられた対処資源に関する項目としては、対処スタイル計10項目、支援ネットワーク計8項目であった(表2)。対処スタイルは、「感情を他の人と分かち合う」「感情を押し込める」「リラックスする」「自分を忙しくさせる」の4つに分類することが可能であった。また、支援ネットワークには、大きく分けて日本での支援ネットワーク、在比家族からの支援ネットワークがあることが明らかになった。なお、在比家族からの情緒的支援は、電話や手紙を通して行われていた。

表1 社会的経済的ストレイン(N=89)

	G1 (非合法)	G2 (非合法)	G3 (合法)	G4 (非合法)	G5 (合法)	G6 (非合法)	G7 (合法)	G8 (非合法)	回答者 合計	FG 合計
在日仕事関連ストレイン										
日本人の同僚に悪い言葉を使われること		11		11		11		1	7	4
日本人の同僚が自分の意見を無視すること					11	11	1		6	3
日本人の同僚にどなられること				1		1		1	3	3
日本人の同僚の失敗を押し付けられること		1	1					1	3	3
日本人の同僚に暴力を振るわれること		1				1			2	2
日本人の同僚に見下されること				1		1			2	2
日本人の上司が厳しいこと			1						1	1
いつ解雇されるか分からないこと		1		1		1		1	4	4
日本人と同等の福利厚生を受けられないこと	11					1			4	2
給与がない・少ないこと				1		1	1		3	3
仕事の環境が悪いこと		1				1			2	2
たずさわっている仕事の内容のこと					1		1		2	2
在比家族関連ストレイン										
家族から過度の経済的期待をかけられること					11		11	11	6	3
家族の無事や健康のこと	1	1					1	1	4	4
送金が正しく使われているか心配なこと		1						1	2	2
家族の財産についてのこと		1							1	1
いつまで送金させられるかということ							1		1	1
配偶者の浮気のこと							1		1	1
日常生活関連ストレイン										
入管や警察に摘発されること	1	1		1		1		1	5	5
日本人の人間関係がフィリピンと異なること	1				11				3	2
住環境がひどいこと				1					1	1
将来関連ストレイン										
いつまで家族と離れていなければならないか不安なこと	1	1	11	1		1	1		7	6
帰国後の家族の中での自分の地位のこと		1					1	1	3	3
帰国後の自分の仕事についてのこと		1	1					1	3	3

表2 対処スタイルと支援ネットワーク(N=89)

	G1 (非合法)	G2 (非合法)	G3 (合法)	G4 (非合法)	G5 (合法)	G6 (非合法)	G7 (合法)	G8 (非合法)	回答者 合計	FG 合計
対処スタイル										
感情をわかちあう										
フィリピン人同士で集まってすごす	11	1	1	1	1	1	1	1	9	8
家族に電話したり手紙を書く	11	1	1	11			1	1	8	6
友達に電話する			1			1			2	2
感情を押し込める										
ひとりで祈る	1	1		1	1	1	1	1	7	7
我慢して誰にも話さない				1 ¹⁾					1	1
リラックスする										
飲酒する				1		1	1	1	4	4
寝る			1			1	1		3	3
風呂に入る			1						1	1
自分を忙しくさせる										
アルバイトや奉仕活動をする	1	1		1			1	1	5	5
遊びに出る						1	1	1	3	3
支援ネットワーク										
教会のフィリピン人による情緒的支援	1	1	1	1	1	1	1	1	8	8
教会のフィリピン人による道具的支援	1	1						1	3	3
教会のフィリピン人による情報的支援					1	1		1	3	3
在日家族からの情緒的支援	1	1			1				3	3
電話相談（公的サービス）による支援			1						1	1
日本人による情緒的支援				1		11		1	4	3
日本人による道具的支援				1					1	1
在比家族からの情緒的支援							11	1	3	1

1) インタビュー

2. 第一次調査の考察

1) 出稼ぎ特有の対処資源について

第一次調査では、FGDの結果に基づき、対象者自身によってあげられた項目以外の対処資源の抽出を行った。さらに、それらの対処資源が、社会的経済的ストレインの精神不健康への関連性にどのように影響しうるのかを考察した。

a) 日本語能力

在日フィリピン人出稼ぎ労働者に対する日本人からの支援において、支援を利用する前提条件として、語学力が必要となるのではないかと思われた。例えばCase1のように、在日フィリピン人出稼ぎ労働者の抱える問題について話を聞こうとする雇用主からの情緒的支援を活用するためには、自分の現況について説明できるだけの語学力が必要となることが考えられる。このように、「日本語能力」は対処スタイルをより多角的に展開するために利用することができるため、対処資源として扱うことが可能であると考えられる。

b) 在比家族からの経済的支援

「在比家族からの経済的支援」とは、在日フィリピン人出稼ぎ労働者の来日を可能にさせる重大な支援である。来日のためにヴィザを取得するためには、最も安いもので60万円から75万円支払う必要があると報告されている(Case3)。これはフィリピンにおける大学新卒者の平均的な月給のおよそ30倍にあたる。従って、海外に出稼ぎに出ようとする者が、ヴィザ取得のためにかかる費用を賄えない場合、家族がそれを肩代わりすることがある。こうした経済的支援とは、Case2のように、「借り」を作ったと認識されていると考えられる。「借り」はself-esteemに影響することが考えられるため、対処行動様式に影響を与える要因として、対処資源として扱うことができよう。

c) 出稼ぎ後の予定

在日フィリピン人出稼ぎ労働者にとって、将来の不安に関しては、帰国に関する目処が

たつかどうかということが影響していると思われた。Case3のように、出稼ぎの終了予定の目処がたっていない者は、いつ帰国できるかわからないために、将来のことや離れて暮らしている在比家族に関する社会的経済的ストレインが経験されると考えられる。逆に、出稼ぎ後の予定がたっていれば、目標もたてやすいし、自分自身の注意もそれに集中させやすい。このことから、「出稼ぎ後の予定」は心理社会的資源における自我資源³⁰⁾に影響を与える要因であると考えられる。従って、出稼ぎに特有と思われる対処資源として扱うことが可能であると考えられた。

2) 第二次調査のための調査枠組の設定

以上の考察に基づき、第二次調査のための研究の分析枠組を立てた。

社会的経済的ストレインに関しては、FGDで得られた項目に基づいて調査項目を作成した。なお、調査対象者の集まる教会の関係者が、非合法労働が特定されてしまうような項目は外すように希望したため、「入国管理局や警察に摘発されること」「在留資格」については調査項目から外した。

日常生活関連ストレインには、居住者としての在日外国人にとって、外国生活からくる孤独感の寂しさを癒すのに少なからぬ影響を与えていることが指摘されているエスニック情報⁴⁵⁾や、レジャー・レクリエーションに関する不満足度についての項目を加えた。従って、合計19の社会的経済的ストレイン(在日仕事関連ストレイン6項目、在比家族関連ストレイン6項目、日常生活関連ストレイン4項目、将来関連ストレイン3項目)がFGDの結果にもとづいて作成された。

対処資源としての項目については、「対処スタイル」「支援ネットワーク」(在日支援ネットワーク-情緒的支援・情動的支援・道具的支援)「在日の配偶者の有無」「在比家族からの情緒的支援」に加え、在日フィリピン人出稼ぎ労働者に特有と思われる「日本語能力」「在比家族からの経済的支援」「出稼ぎ後の予定」の項目を設けた。

IV 第二次調査の結果

第二次調査の分析の対象となった265人の属性、社会的経済的特性、支援ネットワークなどの概要を以下に示す(括弧内は%)。

1. 属性および社会的経済的特性

性別は男性183人(69.1)女性80人(30.2), 無回答2人(0.8)。年齢平均は33.8歳(±7.0)最年少19歳, 最年長53歳。最終学歴については大学卒以上が

表3 対象者の属性および社会的経済的特性(N=265)

		N	%	
性別	男性	183	69.1	
	女性	80	30.2	
	n.a.	2	0.8	
年齢	平均33.8 ± 7.0歳 最低19歳 最高53歳			
	20歳代以下	78	29.4	
	30歳代	124	46.8	
	40歳代以上	60	22.8	
	n.a.	3	1.1	
在比家族の経済的状况	生活するのにかなり困難	24	9.1	
	困難であるが生活していける	158	59.6	
	困難ではない	37	14.0	
	n.a.	46	17.4	
最終学歴	小学校卒業レベル	0	0	
	ハイスクール中退レベル	21	7.9	
	ハイスクール卒業レベル	29	10.9	
	職業学校または大学中退	81	30.6	
	大学卒業	117	44.2	
	n.a.	17	6.4	
結婚形態	既婚者	185	69.8	
	独身者	72	27.2	
	n.a.	8	3.0	
滞り期間	平均50.4 ± 31.6ヶ月 最短1ヶ月 最長168ヶ月			
	1年未満	27	10.2	
	1年以上~2年未満	45	17.0	
	2年以上~3年未満	25	9.4	
	3年以上~4年未満	30	11.3	
	4年以上~5年未満	56	21.1	
	5年以上~6年未満	26	9.8	
	6年以上	46	17.4	
	n.a.	10	3.8	
	来日動機	家族を経済的に支援するため	全く/だいたい/どちらかといえば賛成	220
		全く/だいたい/どちらかといえば反対	8	3.0
		n.a.	37	14.0
将来自分のビジネスに投資するため		全く/だいたい/どちらかといえば賛成	183	69.1
		全く/だいたい/どちらかといえば反対	15	5.7
		n.a.	67	25.3
日本での生活を体験するため		全く/だいたい/どちらかといえば賛成	125	47.2
		全く/だいたい/どちらかといえば反対	41	15.5
		n.a.	99	37.4
稼得収入(月毎)	平均¥205,200 ± 77,048 最低¥20,000 最高¥400,000			
	~ ¥100,000	21	7.9	
	¥110,000~ ¥150,000	52	19.6	
	¥160,000~ ¥200,000	55	20.8	
	¥210,000~ ¥250,000	43	16.2	
	¥260,000~	47	17.7	
	n.a.	47	17.7	
送金状況	現在定期的に送金している	203	76.6	
	現在はしていないが過去にしていたことがある	26	9.8	
	n.a.	36	13.6	
定期送金額/稼得収入(月毎)	平均¥98,106 ± 55,504 最低¥10,000 最高¥500,000			
	~ ¥50,000	55	20.8	
	¥60,000~ ¥100,000	97	36.6	
	¥110,000~ ¥150,000	37	14.0	
	¥160,000~	17	6.4	
	n.a.	59	22.3	

117人(44.2)と最も多かった。結婚形態では185人(69.8)が既婚者であった。

来日前の出身家族の経済状況は「生活するのに大変困難」24人(9.1)「困難であるが生活して行ける」158人(59.6)「困難ではない」37人(14.0)無回答46人(17.4)。

対象者の滞り期間は平均50.4ヶ月(±31.6)、最短1ヶ月、最長168ヶ月であった。来日動機「家族を経済的に支援するため」に「賛成・だいたい賛成・どちらかといえば賛成」とした者は220人(83.0)であった。

日本での労働状況については、性別と職種には有意な差がみられ($p < 0.01$)、男性は建設労働者103人(61.3)、工場労働者43人(25.6)、エンジニア8人(4.8)の順で多く、女性は工場労働者47人(66.2)、エンターテイナー11人(15.5)、自営業4人(5.6)の順で多かった。日本での稼得収入については、平均205,200円(±77,048)、最低20,000円、最高400,000円であった。現在在比家族に定期的に送金している者は203人(76.6)であった。また、定期送金額(月毎)は平均98,106円(±55,504)であった(表3)。

2. 対処資源

日本で抑うつ状態になった時にどのような対処スタイルをとることが多いかたずねたところ、自分の感情を押し込めるという対処スタイルを「全くとらない・ほとんどとらない・あまりとらない」回答した者は108人(40.8)であった。

日本語能力については労働者個人の主観的評価による日本語会話能力についてたずねた。その結果poor 46人(17.4) fair 204人(77.0) fluent 10人(3.8)無回答5人(1.9)であった。

在比家族からの経済的支援に関しては、「自分の来日前に家族がヴィザのために出費した」と回答した者は144(54.3)を占めていた。

また、出稼ぎ終了後の予定として「日本を離れる予定である」と回答した者は224人(84.5)であり、うち197人(87.9)が「フィリピンに帰国する予定である」と回答している(表4)。

3. 社会的経済的ストレインの4つの関連領域

本調査では、第一次調査で得られた項目に基づき、CES-D得点に影響を及ぼす変数として計19項

目のストレインを設問した。このうち「配偶者の浮気」に関する項目は、他項目に比べ回答数が少ない($n=141$)ことと設問内容の性質から、回答の信頼性も低いと考え、この項目を外して分析を行うことにした。これら18項目のストレインは、次のように得点化した。不安・懐疑に関する項目については各々の項目の得点(0点から5点)をそのまま用いた。満足度に関する項目については得点を逆転した。そして、関連領域毎に項目の単純加算を行った。従って、得点が高いほどストレインが強くなる。領域別の平均得点は、在日仕事関連ストレイン(6項目)は10.14点(±6.10)、在比家族関連ストレイン(5項目)は11.39点(±5.25)、日常生活関連ストレイン(4項目)は6.82点(±4.82)、将来関連ストレイン(3項目)は7.89点(±4.31)であった。次に、各関連領域を構成する項目の内部整合性を調べるため、Cronbachの α 係数を算出した。 α 係数は0.60から0.85であった(表5)。

4. 属性、社会的経済的特性および対処資源の精神不健康への関連

本調査では、在日フィリピン人の平均CES-D得点は、平均17.52点(±9.23)最低1点、最高46点であった。またCronbachの α 係数は0.83であった。

対象者の属性、社会的経済的特性別にCES-Dの平均得点を比較したところ、性別での比較では、男性17.76点、女性17.29点であった。年齢別の比較では、20歳代17.26点、30歳代17.98点、40歳代17.41点であった。結婚形態別の比較では、既婚者17.49点、独身者17.50点であった。また、稼得収入(月毎)に占める定期送金額が50%未満の者は15.01点、50%以上の者は19.71点であった。なお、平均値の差の検定の結果、有意な差が見られたのは、定期送金額が月収の50%以上であるかどうかであり、50%以上の者でCES-D得点が有意に高いことが明らかになった($p < 0.05$)(表6-1)。また、「感情を押し込める」という対処スタイルをとる傾向の強弱についても有意な傾向が見られ、「感情を押し込める」という対処スタイルを「時々とる・よくとる・いつもとる」と回答した者は19.43点、「全くとらない・ほとんどとらない・あまりとらない」と回答した者は16.49点で、前者で

表4 対象者の持つ対処資源 (N=265)

		N	%
対処スタイル			
感情をわかちあう	全く／ほとんど／あまりとらない	56	21.1
	時々／よく／いつもとる	160	60.4
	n.a.	49	18.5
感情を押し込める	全く／ほとんど／あまりとらない	108	40.8
	時々／よく／いつもとる	92	34.7
	n.a.	65	24.5
リラックスする	全く／ほとんど／あまりとらない	38	14.3
	時々／よく／いつもとる	186	70.2
	n.a.	41	15.5
自分を忙しくさせる	全く／ほとんど／あまりとらない	22	8.3
	時々／よく／いつもとる	203	76.6
	n.a.	40	15.1
日本語能力			
	POOR (通訳なしでは生活できない)	46	17.4
	FAIR (日常生活の最低限の会話ができる)	204	77.0
	FLUENT (通訳なしで日常生活ができる)	10	3.8
	n.a.	5	1.9
在日支援ネットワーク			
情緒的支援 (寂しい時に慰めてくれる人)	一人もいない	35	13.2
	一人以上いる	197	74.3
	n.a.	33	12.5
情動的支援 (病院の情報を聞ける人)	一人もいない	36	13.6
	一人以上いる	217	81.9
	n.a.	12	4.5
道具的支援 (保証人になってくれるよう頼める人)	一人もいない	38	14.3
	一人以上いる	216	81.5
	n.a.	11	4.1
在日の配偶者の有無¹⁾			
	配偶者が日本にいる	67	36.2
	配偶者が日本以外の国にいる	110	59.5
	n.a.	8	4.3
在比家族からの支援			
情緒的支援 (在比家族から感謝の言葉を言われる)	全く／ほとんど／あまり言われない	31	11.7
	時々／よく／いつも言われる	185	69.8
	n.a.	49	18.5
経済的支援 (来日前に在比家族がヴィザのために出費)	出費した	144	54.3
	出費しなかった	85	32.1
	n.a.	36	13.6
出稼ぎ終了後の予定			
日本を離れる予定であるか	はい	224	84.5
	いいえ	14	5.3
	n.a.	27	10.2
日本を離れた後どこへ行くか ²⁾	フィリピンに帰国する	197	87.9
	第三国へ行く	21	9.4
	n.a.	6	2.7
いつフィリピンに帰国するか ³⁾	まだ未定	136	69.0
	できるだけ長く日本にいてから	34	17.3
	労働契約が終ってから	21	10.7
	n.a.	6	3.0

1) 既婚者のみ 2) 日本を離れる予定の者のみ 3) 帰国する予定の者のみ

表5 領域別社会的経済的ストレインの信頼性係数

	N(欠損値)	項目数	得点	平均得点(SD)	レンジ	信頼性係数
在日仕事関連領域	187(78)	6	0~5	10.14(6.10)	0~30	0.73
在比家族関連領域	180(85)	5	0~5	11.39(5.25)	0~25	0.60
日常生活関連領域	202(63)	4	0~5	6.82(4.82)	0~20	0.85
将来関連領域	197(68)	3	0~5	7.89(4.31)	0~15	0.68

CES-D得点が高い傾向があった ($p < 0.1$)。また、「寂しい時に慰めてくれる人」が「一人もいない」と回答した者は18.00点、「一人以上いる」と回答した者は17.53点で、前者でCES-D得点が高い傾向にあった ($p < 0.1$) (表6-2)。

また、在日仕事関連ストレインと日常生活関連ストレインとの相関 ($r = .707, p < 0.001$) および在比家族関連ストレインと将来関連ストレインとの相関 ($r = .499, p < 0.001$) がそれぞれ強く、その他の項目間では $r = .184$ 以上の相関は見られなかった (表7)。

5. 領域別社会的経済的ストレインと精神不健康との関連

各領域別にCES-D得点との相関関係をみたところ、在比家族関連ストレイン ($r = .334, p < 0.001$) 将来関連ストレイン ($r = .226, p < 0.01$) 在日仕事関連ストレイン ($r = .215, p < 0.01$) 生活関連ストレイン ($r = .122, n.s.$) の順で相関が見られた (表7)。

6. 領域別社会的経済的ストレインと精神不健康の関連性を修飾する諸因子

社会的経済的ストレインと対処資源が精神不健康に与える影響を検討するため、以下の手順で分析を行った。社会的経済的ストレインのうち、CES-D得点との有意な相関が見られた3つの関連領域ストレインの得点を人数毎に三水準にわけ、それぞれ「低得点群」「中得点群」「高得点群」と

表6-1 対象者の属性・社会的経済的的特性別CES-D平均得点および平均値の差の検定 (N=265)

		N	CES-D得点	SD	有意水準	
性別	男性	143	17.76	8.66	n.s.	
	女性	58	17.29	10.54		
年齢	20歳代以下	62	17.26	9.25	n.s.	
	30歳代	94	17.98	8.55		
	40歳代以上	44	17.41	10.72		
在比家族の経済的状況	生活するのにかなり困難	13	18.46	8.57	n.s.	
	困難であるが生活していける	136	18.34	9.54		
	困難ではない	29	14.55	8.95		
最終学歴	ハイスクール中退レベル	17	14.65	8.08	n.s.	
	ハイスクール卒業レベル	22	17.86	10.28		
	職業学校または大学中退	63	18.17	10.22		
	大学卒業	89	17.53	8.60		
結婚形態	既婚者	140	17.49	9.08	n.s.	
	独身者	58	17.50	9.73		
滞在期間	1年未満	21	16.00	10.65	n.s.	
	1年以上～2年未満	35	17.77	8.51		
	2年以上～3年未満	20	21.30	9.14		
	3年以上～4年未満	20	18.85	8.53		
	4年以上～5年未満	44	16.23	10.35		
	5年以上～6年未満	20	18.25	8.14		
	6年以上	37	17.00	8.82		
来日動機	家族を経済的に支援するため	全く／だいたい／どちらかといえば賛成	170	16.98	8.95	n.s.
		全く／だいたい／どちらかといえば反対	7	22.71	5.99	
	将来自分のビジネスに投資するため	全く／だいたい／どちらかといえば賛成	151	17.61	9.58	
		全く／だいたい／どちらかといえば反対	10	17.70	7.36	
	日本での生活を経験するため	全く／だいたい／どちらかといえば賛成	105	16.96	9.21	n.s.
	全く／だいたい／どちらかといえば反対	32	19.53	9.26		
工場労働・建設労働に従事	該当者	152	17.36	11.27	n.s.	
	非該当者	39	17.40	8.82		
稼得収入 (月毎)	～¥100,000	16	18.25	10.95	n.s.	
	¥110,000～¥150,000	41	17.12	10.09		
	¥160,000～¥200,000	46	19.35	9.70		
	¥210,000～¥250,000	35	16.89	8.46		
	¥260,000～	40	15.58	7.36		
送金状況	現在定期的に送金している	164	17.46	9.23	n.s.	
	現在はしていないが過去にしていたことがある	23	19.52	9.82		
定期送金額／稼得収入 (月毎)	50%未満	104	15.01	7.54	*	
	50%以上	51	19.71	10.34		

* $p < 0.05$

表6-2 対象者の持つ対処資源別 CES-D 平均得点および平均値の差の検定 (N=265)

		N	CES-D得点	SD	有意水準
対処スタイル					
感情をわかちあう	全く／ほとんど／あまりとらない	43	17.33	9.59	n.s.
	時々／よく／いつもとる	129	18.05	9.27	
感情を押し込める	全く／ほとんど／あまりとらない	87	16.49	8.54	#
	時々／よく／いつもとる	74	19.43	10.31	
リラックスする	全く／ほとんど／あまりとらない	29	18.41	8.04	n.s.
	時々／よく／いつもとる	146	17.71	9.76	
自分を忙しくさせる	全く／ほとんど／あまりとらない	15	21.00	10.56	n.s.
	時々／よく／いつもとる	161	17.34	9.17	
日本語能力					
	POOR (通訳なしでは生活できない)	38	17.76	10.43	n.s.
	FAIR (日常生活の最低限の会話ができる)以上	163	17.48	8.98	
在日支援ネットワーク					
情緒的支援 (寂しい時に慰めてくれる人)	一人もいない	26	18.00	7.53	#
	一人以上いる	155	17.53	9.37	
情動的支援 (病院の情報を聞ける人)	一人もいない	24	16.29	9.10	n.s.
	一人以上いる	174	17.77	9.29	
道具的支援 (保証人になってくれるよう頼める人)	一人もいない	28	17.32	8.35	n.s.
	一人以上いる	171	17.62	9.40	
在日の配偶者の有無¹⁾					
	配偶者が日本にいる	53	16.70	9.24	n.s.
	配偶者が日本以外の国にいる	82	17.91	8.96	
在比家族からの支援					
情緒的支援 (在比家族から感謝の言葉を言われる)	全く／ほとんど／あまり言われない	25	19.44	9.83	n.s.
	時々／よく／いつも言われる	154	17.22	9.11	
経済的支援 (来日前在比家族がヴィザのために出費)	出費した	116	18.51	9.58	n.s.
	出費しなかった	70	16.43	8.89	
フィリピンへの帰国予定²⁾					
	労働契約が終ってから	20	20.00	9.64	n.s.
	できるだけ長く日本にいてから	35	16.17	8.82	
	まだ未定	121	17.83	9.49	

1) 既婚者のみ 2) 帰国する予定の者のみ # p < 0.1

表7 領域別社会的経済的ストレインと CES-D 得点の相関

	在日仕事関連ストレイン (N=157)	在比家族関連ストレイン (N=156)	日常生活関連ストレイン (N=170)	将来関連ストレイン (N=165)
在日仕事関連ストレイン				
在比家族関連ストレイン	.184*			
日常生活関連ストレイン	.707***	.059		
将来関連ストレイン	.057	.499***	-.107	
C E S - D 得点	.215**	.334***	.122	.226**

*** p < 0.001 ** p < 0.01 * p < 0.05

した。対処資源は「該当者」「非該当者」といったように二水準にわけた。そして社会的経済的ストレインと対処資源の組み合わせ毎に因子を配置しこれを独立変数とし、CES-D得点を従属変数とする二元配置分散分析を行った。そして主効果と2次の交互作用効果を分析した。

CES-D得点に有意に関連していたのは、主として社会的経済的ストレインの主効果であった。対処資源と社会的経済的ストレインの交互作用効果については、日本語能力は、在日仕事関連ストレ

インおよび将来関連ストレインとの組み合わせによる交互作用効果がCES-D得点に有意に関連していることが明らかになった。しかし、外れ値の影響を受けたため、交互作用効果の解釈は困難であった。また、契約終了後帰国予定かどうかは、在比家族関連ストレインとの交互作用がCES-D得点に有意に関連していた。しかし、外れ値の影響を受けたため、交互作用効果の解釈は困難であった。また、できるだけ長く滞在する予定かどうかは、在比家族関連ストレインとの交互作用がCES-

D得点に有意に関連していた。しかし、外れ値の影響を受けたため、交互作用効果の解釈は困難であった。

なお、統計的には検討課題を残すものの、交互作用効果が解釈可能であった項目について、以下に記す。在比家族からの経済的支援は、在比家族関連ストレインを他方に配置した分析において、交互作用効果としてCES-D得点に関連する傾向があった($F=3.03, p=0.051$)。この交互作用効果について、各水準毎のCES-D得点の平均値をとり推移をみたところ、在比家族からの経済的支援がなかった者は、在比家族関連ストレインが高くなるに従ってゆるやかなCES-D得点の伸びを示すのに対し、それがあった者では急激な伸びを示した(図1)。これは第一次調査における仮説(在比家族からの経済的支援があった者は、なかった者に比べ、精神不健康が強化される)を支持する傾向があることが明らかになった。

V 全体考察

ここでは第一次調査および第二次調査を通しての全体的な考察を試みる。

1. 国際労働力送り出し国側の要因への着眼

本研究においては、第一次調査においてFGDという探査的な調査手法を用いることで、社会科学系の在日外国人研究において重視されていなかった領域の社会的経済的ストレイン(すなわち在比

家族関連ストレイン、将来関連ストレイン)に着眼することができた。従来の社会科学分野における在日外国人労働者研究においては、在日外国人労働者研究は、労働力としての位置付け^{8, 15, 16, 17, 43, 46, 47}、あるいは、地域社会における「居住者」^{29, 30}としての位置付けがなされてきた。それは、外国人労働者自体というよりは、国際労働力受け入れ国としての日本の社会構造に着眼した結果であると考えられた。しかし、精神不健康状態など、外国人労働者自体に着眼する場合、在日仕事関連ストレイン、日常生活関連ストレインといった国際労働力受け入れ国側の要因のみならず、在比家族関連ストレイン、将来関連ストレインといった送り出し国側の要因にも着眼する必要があることが本研究のFGDによって示唆された。また、各社会的経済的ストレインの項目間の相関をみると、在日仕事関連ストレインと日常生活関連ストレインとの相関、および在比家族関連ストレインと将来関連ストレインとの相関がそれぞれ強かった。このことは、在日仕事関連ストレインと日常生活関連ストレインとは国際労働力受け入れ国側の要因として、在比家族関連ストレインと将来関連ストレインは国際労働力送り出し国側の要因として、それぞれ背景が共通していることを示唆するものと思われた。本研究の成果は、国際労働力受け入れ国側の要因よりも、送り出し国側の要因の方がCES-D得点との相関が高値であることを示したことで

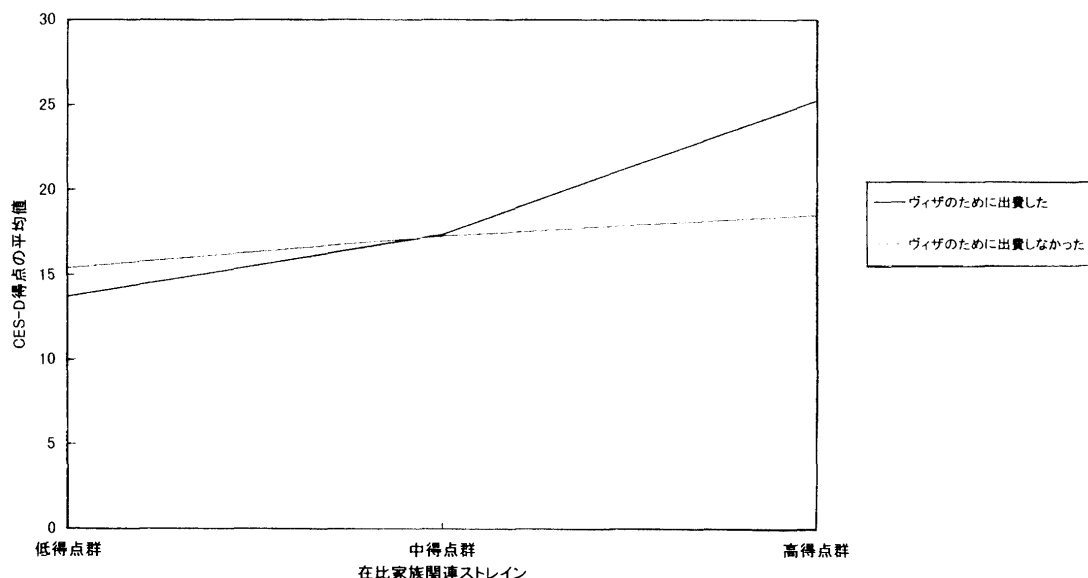


図1 在比家族の経済的支援の有無とCES-D得点の平均値の推移

ある。一方、日常生活関連ストレインについては、本研究においてはCES-D得点とは有意な関連が見られなかった。従来の外国人や在外邦人の精神不健康に関する研究においては、「異文化ストレス」^{31, 34, 35, 36)}「海外不適応」¹⁴⁾などの用語が盛んに用いられ、日常生活において触れる異文化という文脈における外国人の精神不健康が多く研究されてきたことを考えると、本研究の結果は興味深い。労働力送り出し国側の要因については、今後の在日外国人労働者研究において着眼すべき領域であろう。

2. 出稼ぎ労働者と在比家族との関係

本研究の結果はまた、労働力送り出し国側の要因の中でも、特に、在比家族に関する要因が彼らの精神不健康と関連していることが示唆された。

この点を考察するにあたって、まず出稼ぎ労働者と在比家族との関係について考えてみよう。在日フィリピン人出稼ぎ労働者にとって、家族を経済的に支援するために働くとは一体どういう意味を持つのだろうか。Case 4によると、より稼いでいる者がそうでない者を助けることは、フィリピン人のメンタリティーとして一般的に受け入れられていることがわかる。注目すべきは、たとえば家族を養うことが目的で来日したわけでもなく、また家族からなんら援助の要請がなかったとしても、出稼ぎ労働者自身がなんとなく義務感を感じて送金している者がいることである。

このような在日フィリピン人出稼ぎ労働者と在比家族との関係は、ホルンスタイナーの指摘するフィリピンにおける *utang na loob*¹¹⁾ (内面的借り、恩義) という相互補完的な支援の原理に基づく行動様式に酷似している。ホルンスタイナーによれば、*utang na loob* は家族以外の人間関係においても使われるが、親子、兄弟姉妹の関係において用いられた場合、はるかに深い感情を伴うものであるとされる。親は子を育てる義務があり、子は親を尊敬し、親に服従し、年老いた親を扶養して恩に報いる。肉親が助けを必要としている時には、どのようなことがあろうとも助けなければならない。もしもこのように相互に補完しあう関係を怠ることがあれば、家族を結びつけている神聖な絆

が絶たれ、家族は裏切られたとして深く痛恨する。また、家族の信頼を裏切った者は *walang utang na loob* (恩知らず) とか *walang hiya* (恥知らず) と非難される。

この相互補完関係は、自分が日本、家族がフィリピンと物理に離れても、在日フィリピン人出稼ぎ労働者によって依然として根強く認知されていることから、彼らは来日してからも、在比家族との関係に拘束されていることが考えられる。家族を経済的に支援するために来日している者が83.0%以上を占める現状は、この傾向がいやが上にも強められていることを示唆している。

このように、在日フィリピン人出稼ぎ労働者はどんな時にも送金義務があるかのように行動せざるを得ない状況におかれている一方、自分の稼得収入の50%以上を送金している者は、そうでない者に比べ有意にCES-D得点が高いことからわかるように、送金額の相対的な負担率が精神不健康に関連することが明らかになった。つまり、家族により多く支援しようと自分の生活を切りつめれば切りつめるほど、結果的には彼らが精神不健康に陥っていくという構造が浮かび上がってきた。言い換えれば、在日フィリピン人出稼ぎ労働者にとって、意識するとせざるに関らず自分に過度の送金義務を課すことを促す**在比家族との人間関係**が、結果的には彼らの精神不健康に影響していると考えられる。このことは、在比家族からの経済的支援という要因が、在比家族関連ストレインと精神不健康との関連性をより促進する傾向が見られたことから示唆される。すなわち、在比家族からの経済的支援という要因は、在日フィリピン人出稼ぎ労働者によって「借り」を作ったと認識されるため、在比家族との関係の拘束から逃れる余地を与えないと解釈される。

なお、第二次調査においては、在比家族関連ストレインとCES-Dとの関連性に対する在比家族からの経済的支援の影響の仕方については、統計的な傾向 ($p=0.051$) があることが示唆されたが、仮に標本数が十分に大きければその傾向に関して、何らかの方向性が見えてくる因子ではないかと思われる。従って今後の研究において取り上げる意

味があると考えられる。

3. 本研究の限界

本研究では、調査対象者をフィリピン人のよく集まる教会の礼拝の出席者に限定せざるを得なかった。教会とは在日フィリピン人にとって重要なエスニック・ネットワークとしての機能を果たしており¹⁰⁾、日本で生活していくための様々な情報や交流関係のコアとなるところである。従って、問題は教会に出席することのできない者でより生じ易いと思われる。また、本研究では、調査対象者が配票調査に慣れていなかったために、無回答に落ちた項目が多かった。従って、本研究ではCES-Dおよび社会的経済的ストレインの尺度については、欠損値を含まない完全回答を行った者を対象に分析せざるを得なかった。そのためにデータに偏りが発生した可能性がある。また、標本数が少なかったために、ケース数の極めて小さいセルができてしまい、外れ値の影響を免れなかったために、交互作用効果などの統計的な解釈が困難になったと思われた。

おわりに

本研究では、在日フィリピン人出稼ぎ労働者とその家族との関係のいわゆるマイナスの機能面を中心に考察した。しかし、いうまでもなく相互補完的な家族の絆はプラスにも機能しうる。本研究においては統計的には関連が裏付けられなかったものの、在外フィリピン人出稼ぎ労働者に対して情緒的支援を与える重要な対処資源としての家族の存在は否めない。従って、家族関係のプラスの機能面をどのように活用させていくかが今後の課題となると思われる。

※本研究は、平成7年度明治生命厚生事業団第3回「健康文化」研究助成研究「在日外国人の健康問題と受療行動に関する要因の研究」の一環として行われた。

注 釈

(1) 在日フィリピン人を対象としたのは、筆者が4年間にわたってフィールドで関わり続けた外国人であり、ラポールが取りやすかったという理由による。なお在日フィリピン人出稼ぎ労働

者は1980年代後半より増加の傾向が著しく、就労資格取得者(1995年12月末日現在)は14,932人²⁷⁾、不法残留者(1996年5月1日現在)は41,997人¹²⁾である。また、不法残留をしている外国人のうち14.8%がフィリピン人であると言われていた。これは韓国人について2番目に多い人数である¹²⁾。

(2) *tensiyon* とは "state or condition of nervousness or anxiety" という意味である³⁹⁾。

参考文献

- 1) 阿部裕：外国人労働者：その精神医学的概説。現代のエスプリ，335；19-28，1995。
- 2) Attig, B.Y., Attig, G.A. and Boonchalaksi, W.: Introduction : Benefits and Precautions in Qualitative Research. In : (ed.), B. Y. Attig, G. A. Attig and W. Boonchalaksi. A Field Manual on Selected Qualitative Research Methods. IPSR Publications, Nakhon Pathom, 1-6, 1991.
- 3) Boonchalaksi, W.: Reliability and Validity in Qualitative Studies. In : (ed.), B. Y. Attig, G. A. Attig and W. Boonchalaksi. A Field Manual on Selected Qualitative Research Methods. IPSR Publications, Nakhon Pathom, 14-26, 1991.
- 4) Carino, B.V.: Migrant Workers from the Philippines. In: (ed.), A.Paganoni. Philippine Labor Migration. Scalabrini Migration Center, Quezon City, 4-21, 1992.
- 5) Cruz, V.P.: Seasonal Orphans and Solo Parents: The Impact of Overseas Migration. Scalabrini Migration Center, Quezon City, 1987.
- 6) Dawson, S., Manderson, L. and Tallo, V.L.: A Manual for the Use of Focus Groups, INFDC, Boston, 1993.
- 7) Debus, M. and Noyelli, P.: Methodological Review: A Handbook for Excellence in Focus Group Research. AED, Washington D.C., 1986.
- 8) 外国人労働者実態調査研究会：外国人労働者実態調査報告書。手塚和彰，駒井洋，小野五郎ほか編：外国人労働者の就労実態：総合的実態調査報告集。明石書店，東京，69-291，1992。

- 9) 林峻一郎:「ストレス」の肖像. 中央公論社, 東京, 1993.
- 10) 平野裕子: フィリピン人社会. 駒井洋編: 新来外国人キーワード集: 明石書店, 東京, 1997.
- 11) ホルンスタイナー・メアリー・ラセルス, 山本まつよ訳: 平地フィリピンにおけるレシプロシティ. ホルンスタイナー・メアリー・ラセルス編: フィリピンのこころ. めこん, 東京, 96-129, 1992.
- 12) 法務局入国管理局編: 本邦における不法残留者数(平成8年5月1日現在). 国際人流, 112; 18-21, 1996.
- 13) 稲川美弥子, 渥美智子, 星野良一ほか: 在日外国人の適応不全: 静岡県西部地域在住外国人の精神科受診者の調査より. 臨床精神医学, 22(2); 159-166, 1993.
- 14) 稲村博: 日本人の海外不適応. 日本放送出版協会, 東京, 1989.
- 15) アンジェロ・イシ: 日系ブラジル人からみた日本での労働. 渡辺雅子編: 共同研究: 出稼ぎ日系ブラジル人 上 論文篇 就労と生活. 明石書店, 東京, 137-158, 1995.
- 16) 喜多川豊宇, 村田宏雄: 首都圏・太田市におけるアジア系不法就労者のヒヤリング調査: パキスタン・バングラディシュ・イラン人労働者の比較研究. 山下袈裟男(研究代表): ヒトの国際化に関する総合的研究: 特に外国人労働者に関する調査研究を中心に. 平成2, 3年度科学研究費補助金一般研究A研究成果報告書(研究課題番号02401004) 1992.
- 17) 国際協力事業団: 日系人本邦就労実態調査報告書. 駒井洋編: 外国人定住問題資料集成. 明石書店, 東京, 75-280, 1995.
- 18) 駒井洋著: 外国人労働者定住への道. 明石書店, 東京, 1993.
- 19) 古谷野亘, 長田久雄: 実証研究の手引き: 調査と実験の進め方・まとめ方. ワールドプランニング, 東京, 1995.
- 20) Krippendorff, K.: Content Analysis: An Introduction to Its Methodology. Sage, Beverly Hills, 1980.
- 21) Kuo, W.H.: Prevalence of Depression Among Asian-Americans, Journal of Nervous and Mental Disease, 172; 449-57, 1984.
- 22) Kuo, W.H. and Tsai, Y.M.: Social Networking, Hardiness and Immigrant's Mental Health, Journal of Health and Social Behavior, 27; 133-149, 1986.
- 23) Lazarus, R.S. and Folkman, S.: Stress, Appraisal, and Coping. Springer, New York, 1984.
- 24) McDowell, I. and Newell C.: Measuring Health: A Guide to Rating Scales and Questionnaires. Oxford University Press, New York, 1996.
- 25) 三好亜矢子: HELPディレクター・大島静子さんに聞く. 現代のエスプリ, 249; 100-108, 1988.
- 26) 日経新聞, 1992年5月29日.
- 27) 入管協会編: 在留外国人統計. 入管協会, 東京, 1996.
- 28) 奥田道大, 和田清美, 田嶋淳子: 「もう一つの国際化」としての池袋: アジア系外国人の生活拠点化. 立教大学社会学部研究報告書, 東京, 1989.
- 29) 奥田道大, 田嶋淳子: 新宿のアジア系外国人: 社会学的実態報告. 立教大学社会学部調査報告書, 東京, 1992.
- 30) 奥田道大, 田嶋淳子: 池袋のアジア系外国人: 社会学的実態報告. めこん, 東京, 1993.
- 31) 大西守編: カルチャーショック. 同朋舎出版, 京都, 1988.
- 32) 大西守: 在日外国人の精神衛生の現状. こころの臨床ア・ラ・カルト, 28; 3-7, 1989.
- 33) 大西守, 高品登美子, 植本雅治ほか: 対応している私たちが見た実態, 背景, 問題点: 病院, 保健所, 民間援助団体の協力の可能性. こころの臨床ア・ラ・カルト, 28; 17-30, 1989.
- 34) 大西守: 異文化ストレス症候群. バベルプレス, 東京, 1992.
- 35) 大西守: 異文化ストレス症候群. 臨床精神医学増刊号: 238-244, 1994.
- 36) 大西守: 日本在住の外国人労働者・留学生のメンタルヘルス. 日本社会精神医学会雑誌, 4(1); 58-62, 1995.
- 37) Pearlin, L.I. and Schooler, C.: The Structure of Coping. Journal of Health and Social Behavior, 19;

2-21, 1978.

- 38) Radloff, L.S.: The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population, *Applied Psychological Measurement*, 1; 385-401, 1977.
- 39) Santos, V.C.: *Vicassan's Pilipino-English Dictionary*. National Book Store, Manila, 1983.
- 40) サスキア・サッセン, 森田桐郎ほか訳: 労働と資本の国際移動: 世界都市と移民労働者. 岩波書店, 東京, 1992.
- 41) Shah, M., 矢野栄一, 野田文隆訳: 文化と精神病理. *こころの臨床ア・ラ・カルト*. 47; 11-15, 1994.
- 42) イチロウ・シラカワ, イサム・ナカガワ, 桑山紀彦訳: 日系ブラジル人の出稼ぎ者とその精神疾患について. *こころの臨床ア・ラ・カルト*, 47; 7-10, 1994.
- 43) 総合研究開発機構編: 外国人労働者の社会的受容システムに関する研究. 総合研究開発機構, 東京, 1991.
- 44) 杉山章子, 大西守: 在日外国人のメンタルヘルス. *現代のエスプリ*, 355; 104-115, 1995.
- 45) 白水繁彦編: *エスニック・メディア: 多文化社会日本をめざして*, 明石書店, 東京, 1996.
- 46) 東京都立労働研究所編: 東京都における外国人労働者の就労実態. 東京都立労働研究所, 東京, 1991.
- 47) 筑波大学社会学研究室: 在日イラン人: 景気後退下における生活と就労. 駒井洋編: 外国人定住問題資料集成. 明石書店, 東京, 331-587, 1995.
- 48) ヴィドロシェ・D著, 古川冬彦訳: うつの論理, 岩波書店, 1987.
- 49) Vong-ek, P.: How to Conduct Focus Group Sessions. In: (ed.), B. Y. Attig, G. A. Attig and W. Boonchalaksi. *A Field Manual on Selected Qualitative Research Methods*. IPSR Publications, Nakhon Pathom, 92-106, 1991.
- 50) 山本和郎: 生活ストレスへの対処. 石原邦雄, 山本和郎, 坂本弘編: 生活ストレスとは何か. 垣内出版, 東京, 239-268, 1985.

資料 1

〈Case 1〉

R1(Mr.): Sometimes, you see, SACHO (注: 社長) who are giving you KIMOCHI (注: おごること), what you call KIMOCHI. Sometimes, all of us (Filipino workers) are brought by SACHO, (and) we go to the RAMEN house, so we can talk to SACHO. And bring out our troubles---without other Japanese (colleagues). (Group 6)

〈Case 2〉

R1(Mr.): ---I feel lonely, because I cannot go back home---I must work and support my family in the Philippines. I owe them, because they paid for my visa. So I have to reciprocate, and send money. (Group 6)

〈Case 3〉

R1(Mrs.): I feel lonely. Because I am not sure when I can see my family next time. ---Because we don't have visa. We cannot come back here (again once we leave Japan). (So) We cannot easily go home.

R2(Mr.): (If you don't have any visa when you process the immigration) You will be surrendered by immigration, and could not get off. ---After processing, you will be going home. Then when you want to come back here in Japan, that will take a lot of time, a lot of money. ---We have to pay a lot of money to the processing of the (illegal) visa to the fixers (in order to fix visa to come back here).

Q: How much do you have to pay to the fixers?

R2(Mr.): 60 MAN-EN --- 75 MAN-EN. ICHIBAN YASUI NO WA NE. (Group 6)

〈Case 4〉

R1(Ms.): I came here to earn money for my future. ---Though, there is a tendency to do that (remained family in the Philippines rely on the overseas workers financially). Because of the mentality that you earn more, for both parties. For example, even though my parents, they don't ask me to send anything, I feel like having an obligation to send. Because I am earning more, more than they are. (Group 5)